



「ライフ・ラインとしてのいのちの電話と“聴く”ということ 再考」

皆様は、ライフ・ラインと聞くとまず何を思い浮かべるでしょう？

ライフ・ラインとは、一般的には日常生活に不可欠な線などで結ばれたシステムの総称であることから、生命線／命綱とも呼ばれ、その意味合いから「自殺予防」のための電話相談の代名詞としても用いられています。しかし、実際のいのちの電話は、何でもあり?! 生死にかかわる切迫した通話もあれば、性的な話、人生相談、世間話。また、対象も自分自身のことや家族、社会について等々。私が以前面接をしていたある統合失調症の青年は、寝る前に必ずいのちの電話にかけて数分話すというのを日課にしていました。彼にとっては、それが一日を終えるための大切な儀式だったのでしょう。

Lifeという言葉が辞書で引くと、命や人生、生活というだけでなく20以上の意味が表記されています。最近のことですが、それら**Life**の多様な意味を引き受けるライフ・ラインとしてのいのちの電話という視点からあれこれ考えていると、なぜ“聴く”ことを重視するのか、その必然性が私の身体の中に一本の筋が通ったようになってきました。

私のとっているアプローチでは、「クライアントがカウンセリングに望んでいること（面接目標）」を話し合うことからスタートするので、その目標に沿った面接の進め方や有益な質問法などがあり、それが道標となっています。構造がしっかりとあるわけで、それは電話相談の時にも適用されます。

それに比していのちの電話においては、電話であること、その電話で繋がった双方が共に匿名であるということが、

お互いを守る強力な枠組みとなっています。しかし、それとともに匿名性は、何でもありのような曖昧さと幅広さも受け入れています。その中で、通話者についていくためには、質問は減り、より慎重に“聴く”ようになるのは必然のことです。こうやって文字にすると、何を今さら分かりきったことをと思われるかもしれませんが、この腑に落ちる感覚を味わうと、これまでが分かったつもりだったことに気づかされます。その繰り返しです。ただその繰り返しの学びによって、聞き慣れた言葉もリセットされ、新鮮さを取り戻していくように思います。ピギナーズ・マインドというのは、私たちに謙虚さだけではなく、継続していくための原動力や楽しさも与えてくれるもののようなのです。（そのための場の一つが、スーパービジョンであればと願っています。）

さてそんなスーパービジョンの中で、相談員の方たちが時々、「聴くことしかできなかった」と口にされることがありますが、私は相談員の方が「聴くにとどまる」ということをしているのだと思います。それには、多くの忍耐力や思慮深さを要することでしょう。そして、この「聴くにとどまる」ことは、「ライフ・ラインとしてのいのちの電話」らしい黒子の美学の実践だと胸の内できめきながら思っています。

付記：「ライフ・ラインとしてのいのちの電話」とは、時には相談員の方たちの生きがであり、通話者の命根（いのちの元）や人生、身の上話、実生活、伝を幅広く受け止め、清らかな気やスピリットで、弾力性のあるコミュニケーションをとることでしょうか（下線の言葉は、**Life**の意味の一部）。



第43期生電話相談員養成講座を2017年10月4日(締め切り・8月31日)から開始します。「電話ボランティア」「事業ボランティア」募集要項、必要書類等は事務局までお問い合わせください。

福岡いのちの電話は
ボランティア仲間を
募集しています。

里帰り 納涼寄席

夏の夕べ、今年も
笑タイムをどうぞ

八月四日

午後七時 開演

パレモン24

ガスホールにて

詳しくは

「福岡いのちの電話」へどうぞ。